

初恋時

クリムゾン・ヴァンパイア

夏目 翠

Sui Natsume

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 直江まりも



目次

序章 お嬢さまの通う学校	7
第一章 快楽に溺れる人間の弱さ	15
第二章 女王さまとお姫さま	46
第三章 変わった標的	69
第四章 かたいほどに脆い	98
第五章 託宣の巫女と疑惑の痕	125
第六章 暗い ^{かお} 表情をした女の子	159
第七章 もう一つの顔	183
第八章 初恋と運命と	195
終章 変化する心と体	220
あとがき	234

登場人物 紹介



きつ か
橘香

母を亡くし、仲塚原別邸で
世話になる少女



アレク

仲塚原別邸の主



めい た ろう
明太郎

アレクに仕える別邸の執事



ゆう な
由那

別邸のメイド。明那の母



ひじり
聖

アレクに仕える青年。別名 **“かげもり”**



初恋時

クリムゾン・ヴァンパイア



序章

お嬢さまの通う学校

—— 仲塚原市。
なかつらはら

世界的大企業N・G・ワールドをつかさどる仲塚原家のお膝元で、地方都市でありながら、目覚ましい発展を遂とげていた。

また、仲塚原家は教育にも力を入れており、学校も設立している。

それが私立明生女学院であり、日本でもっとも古くに設立されたカトリック系のミッションスクールだ。校舎は煉瓦造りの洋館で、学院内には礼拝堂もある。

通っている生徒は名家の子女たちであるため、校内の警備は厳重だ。当然、教師の身元も厳しく審査されている。

九月一日。長い夏休みが終わり、二学期の始業日、二年A組のクラスは転入生を迎えていた。

「かけ……郡上橘香です。よろしくお願ひします」
 橘香は緊張で声がうわずりそうになるのを堪こらえながら、なんとか自己紹介する。新しい名前はいまだ

慣れず、しつくりこない。

真新しい制服は、ブレザーが増えた昨今の風潮に逆らうような、古式ゆかしいセーラー服だった。

——どうしよう。

クラス中の視線を一身に浴びたせいで、橘香は背中に冷や汗をかいていた。

橘香は十二年前に事故で父を、今年の春先に母を病気で亡くしている。そのときに二人いるうち、上の姉に引き取られたが、理由あって姉とは決別し、今は郡上夫妻の養女になった。郡上橘香となつてから、まだ一月も経つていない。慣れていないのは当然だった。

そんな橘香の内心を、担任の瑞波江梨子みずなみえりこは知るよしもない。

「席は窓側の一番後ろが空いてるわね。郡上さん、そこへ」

「はい……」

言われた通りの場所に行こうとして、指定された

列の一番前の席が空いていることに気づく。

「……………」

新学期早々、欠席なのだろうかと思議に思いながら椅子に座ると、隣の席に座る女子が声を掛けてくれた。

「よろしくね」

「あ、はい……よろしく——」

頭を下げながらちらりと相手の顔を見た橘香は、思わず目を丸くする。

それというのも、相手は明るい栗色の波打つ髪に、高い鼻筋、水色の瞳ひとみが際立つ美少女だったからだ。

モデルのような美貌に、あんぐりと口を開ける。

「わたしの顔に何かついていて？」

警戒するように表情をかたくする少女を見て、橘香は慌てて謝った。

「ご、ごめんなさい……。その、あまりにきれいだから、つい見惚みとれてしまつて。えっと、瞳の色が特に……」

「いったい自分は何を言っているのだろうと、ますます焦りが募る。頬がかあつと熱くなり、うつむきそうになったところで、相手が口元を綻ばせ、にっこりと微笑んだ。

「羅々・シエルダン・高天です」

「ぐ、郡上橘香ですっ」

「さっき聞いたわ」

くすくすと笑われ、橘香は居たたまれなくなる。

「そっ……そうですね。ごめんなさい」

「敬語じゃなくていいから」

苦笑交じりに訂正され、橘香はますます恐縮した。

「大丈夫よ。わたしも同じだから」

「え？」

何のことかと目を丸くした橘香に、羅々が教えてくれた。

「今年の四月に、アメリカからこの学校に転校して

きたの」

「へえ……」

名前からして海外の人だとは思ったはずなのに、流暢な日本語のせいで転校生である可能性をうっかり忘れていた。

「それでは、夏休みの課題の回収は終わりましたね。授業を始めます。教科書を開いて——」

瑞波の言葉で空気が引き締まる。さすが進学校だけあって、始業日でも、すぐに授業が始まるらしい。皆が手元の教科書に集中する中、羅々は気さくに話しかけてきた。

「以前はどこにいたの？」

「D県の……」

言いかけたところに叱責の声が飛ぶ。

「そこ！ いつまで喋っているの」

「申し訳ありません」

「すみませんでした……」

すかさず謝罪を口にする羅々に、橘香も做った。

羅々は少し頭を下げながら、橘香のほうを見遣ると、こっそりと笑ってみせる。まるで「怒られちゃった」

と言わんばかりに舌を出して。

彼女の気さくな性格に、緊張していた橘香も思わず笑みが零れる。

こんな学校に転入してしまつて、どうなるかと気が重かつたが、彼女たちはお嬢さまであつてもエイリアンではない。

そう安堵したのも束の間で、初めての授業を終えた橘香はぐつたりと机にうつぶす。

「どうしよう……」

思わず泣き言が零れた。

さすが名門校だけあつて、前にいた学校よりも授業が進んでいる。遅れを取り戻すためには、かなり勉強しなくては追いつけそうにない。頭を抱える橘香に、羅々が心配そうに声を掛けてくれた。

「郡上さん、大丈夫？ 気分が悪いなら、保健室に案内しましょうか」

のろのろと顔を上げて、橘香は力なくかぶりを振る。

「平気です。ただ、授業が前の学校より進んでいて……」

これからどうしようとは言えそうにない。担任に相談して、補習をお願いできないかと考えていたら

「なら、ノートを貸しましょうか」

「え？」

思いがけない申し出に、橘香はぼかんと羅々を見つめる。

冗談かと思つたが、羅々は本気だった。

「心配しなくても、ノートは日本語でとつてるから見せられると思うわ。わたしでよかつたら、教えることもできるし」

「……いいんですか？」

それが頼めるなら、これほど嬉しいことはない。橘香が表情を輝かせると、羅々にはこやかに頷く。

「もちろんよ」

「ありがと、高天さん！」

思わず握手を求めると、羅々も嬉しそうに握り返してくれた。

「羅々で結構よ。橘香さんと呼んでも？」

「は、はい——」

「羅々さま！」

ちようどそのとき、隣の席に、三人の少女たちが集まつてきた。口々に話し出す。

「先ほどは何を喋っておられたんです？」

「怒られるなんて、羅々さまらしくありませんわ」

「それより、先ほど先生方が話しておられたのを聞いたんですが、化学の蓮見先生、入院されたそうなんです」

慇懃な言葉遣いに、こんな女子高生が今時の日本にまだいたのかと橘香は別の意味で感心する。

ほかんとする橘香に、羅々が口を開いた。

「そんなことより皆さん、橘香さんにご挨拶しないと」

「えっ」

突然、話を振られて、橘香は声が裏返った。

三人の少女たちがいっせいに振り向く。三対の目が橘香を見定めるように眺めてから、羅々の左にいた、つり目気味のポニーテールの女の子が口火を切った。

「ようこそ、明生女学院へ。あたしは三津西舞亜」

次に二つ結びにしている少女が前に出て、橘香に挨拶する。

「出紘乃よ。よろしく」

「錐方紗綾というの」

最後はハーフアップにしている少女だった。

「よ、よろしく」

人数と勢いに押された橘香は、そう言うだけで精一杯だった。

そんな橘香に、舞亜が「ところで」と切り込んでくる。

「郡上さんはどのお家の方なの？」

「は……」

初対面で、名前しか名乗っていない段階で、氏素性を聞かれたのは生まれて初めてだった。

困惑する橘香を差し置いて、舞亜は話し続ける。

「あたしの父は東京の都市銀行の頭取なの。祖父は大臣を務めたこともあるわ。絃乃のお父さまは大手外食産業の社長だし、紗綾は旧宮家の血を引いているのよ。あなたは？」

「えっと……」

責め立てられるような問いかけに、橘香は口籠くごもる。

「だいたい、父というのは血の繋つながりのあるほうだろうか。それとも養い親のほうだろうか。いずれにせよ、尋ねることはできない。父親が二人もいるなんてことを、会ったばかりの人間に簡単に話せるわけがなかった。

困っている橘香を見かねて、羅々が助け船を出してくれる。

「こら。いきなりそんなことを聞くなんで、不作法

じゃありません？」

「羅々さま、申し訳ありません」

先ほどの威勢はどこへいったのか、舞亜はしゅんと肩を落としてしている。その一方で、絃乃が「でも」と口を挟んだ。

「そういう羅々さまこそ、あのシエルダングループの一員ではありませんか」

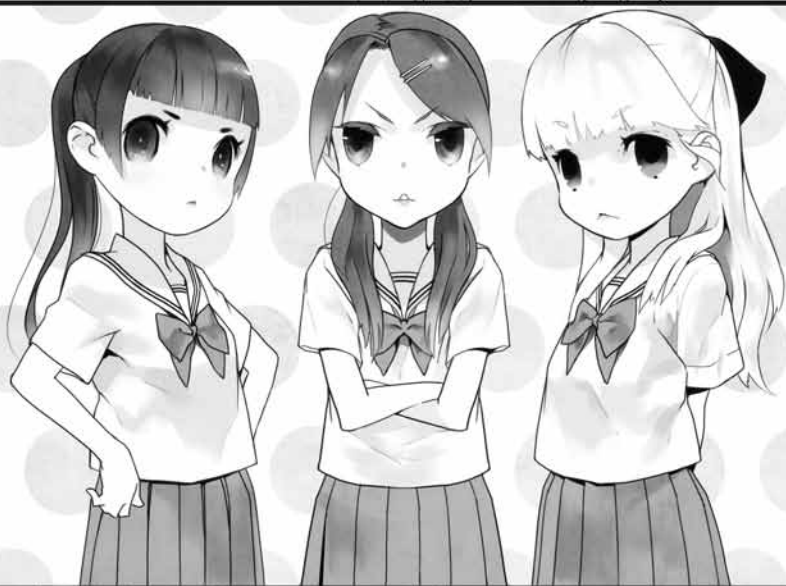
「シエ、シエルダンって……まさか」

吃驚びっくするあまり、最後まで言えなかった橘香に代わって、舞亜が後を継ぐ。

「世界一のホテルオーナー一族よ。さすがにあなたも知っているよね」

無関係のはずの舞亜がなぜか誇らしげに胸を張っている。

シエルダンホテルといえば、世界の主要都市やリゾート地にあり、各国の要人御用達ホテルとして有名だった。日本国内では、東京、大阪、名古屋にありますが、去年、この仲塚原市にもオープンしたらしい。



その創業者一族は有名で、破天荒な人物が多いとメディアでよく取り上げられている。

橘香は改めて羅々を見た。

髪や瞳の柔らかい色合いや、はつきりとした目鼻立ち、何よりもその名前やアメリカから転校してきたことから、羅々はハーフなのだろうとは予想していたが、まさかあのシエルダン一族の一員とは思わなかった。

「まあ、やめてちょうだい。わたしの父は三男だもの。日本支社の統括を任されていて、後継者には選ばれる可能性は低いのだから、家は関係ないでしょう。橘香さん、気にしないでね」

「そ、そう、ですね……」

気にしないでと言われて、はいそうですかと頷けるものでもない。羅々の取りなしに、橘香は乾いた笑いしか返せなかった。

それにしても、さすがは明生女学院だ。良家の子女が集う学舎というキャッチフレーズは伊達ではな

い。

生まれも育ちも庶民の橘香には敷居が高すぎる。

本来ならば、関わる必要のない世界に橘香がいるのは、ある男の命令だった。

——アレクさまのバカッ。

橘香は天井を仰ぎ、自分がこんな学校へ通う元凶となった男を、心の中で罵った。



第一章

快樂に溺れる人間の弱さ

転校初日が終わり、橘香の肩に疲労がのしかかる。

——わたし、馴染めるかしら……。

一日を終えて思ったのは、これからの学校生活に不安しか感じないということだった。

そもそも、橘香がこんな学校に通う羽目になったのには理由がある。

母を亡くした橘香は姉に引き取られたが、その夫からセクハラを受けていた。姉に訴えても聞き入れてもらえず、身の危険を感じた橘香は一学期の終業式が終わるやいなや、家を飛び出した。

間の悪いことに、その頃、仲塚原市民を恐怖のどん底に叩き落とした連続惨殺事件に、他県からやって来たばかりの橘香も巻き込まれてしまう。その過程で姉のうち一人は亡くなり、もう一人は入院して退院の目途がつかない。橘香の人生が大きく変わってしまった。

ほんの一ヶ月ちよつと前まで、橘香は自分がこんな場所に住むことになるとは思わなかった。

足を止めて、何度見ても見慣れない屋敷を見上げる。歴史を感じさせる煉瓦造りの洋館に、鶯が生い繁っている。

仲塚原家別邸。この市のみならず、全国でも指折りの名家である仲塚原家が所有する家で、今橘香が世話になっていいる場所でもあった。

正面玄関を避けて、裏口から入る。この屋敷の奇妙なところはここからもわかる。たとえ裏口であろうと、ドアが二重になっているのだ。一枚目を完全に閉めてから、二枚目を開ける。それが最初に教えられたルールだった。

二枚目の扉を閉めたタイミングで、声が掛かる。「お帰りなさい、橘香さん。新しい学校はどうでしたか?」

「ただ今戻りました……」

橘香を出迎えてくれたのはこの屋敷の執事の郡上明太郎だった。そして、橘香の養い親でもある。

白髪をきちんと撫でつけた物腰柔らかい紳士の

労いに、橘香は苦笑するしかない。

「……疲れました」

おや、と明太郎が片方の眉を上げて何かを言おうとしたとき、ひょいっと奥から顔を出した者がいる。

「橘香ちゃん、帰ったの?」

小柄な体の、少女のようにあどけない顔をしている女性に頭を下げる。

「由那さん、ただいまです。すぐに着替えてお手伝いしますね」

「いやあん。そんな他人行儀なこと言わないで」。

由那ママって呼んでよお」

「…………」

ぷつとかわいらしく頬を膨らませて拗ねる由那に、橘香は言葉を失った。

十七歳の橘香と変わらぬ、ややもすると年下に見えるような外見の由那だが、実際は二十五歳で、明太郎の妻だった。明太郎の年齢をはつきりと聞いたわけではないが、歳の差が四十以上ある結婚も珍し

い。

見た目はどうでも、橘香の養母だ。そのため、由那は「母」と呼ばれることにこだわっているが、橘香は自分と八歳しか違わない人間を「母」と呼ぶのに抵抗があった。

これ以上突つ込まれないように、橘香は話題の矛先を変える。

「明那ちゃんはお昼寝ですか？」

由那と明太郎には生後十一ヶ月の赤子がいた。大抵の親がそうであるように、夫妻も目に入れても痛くないほどの可愛がりようである。

「そうなのお！ 今さつき寝たばかりだから、そのまま置いて来ちゃったー。大丈夫！ 起きたらわかるように、監視モニターがあるから」

橘香の目論見通り、由那は簡単に気を取られてくれた。

「じゃあ、着替えてきますね」

ほくそ笑みそうになるのを堪えながら、その場を

離れようとした橘香を、由那が止めた。

「待ってえ。せつかくだから、アレクさまに制服姿を見せてあげようよお」

「え……」

その名前を聞いて、途端に橘香のテンションが下がる。なんとか断ろうとする前に、明太郎が賛成した。

「それはいいことですね。今日は珍しく、アレクさまがリビングにいらっしやいますし」

気はまったく進まなかったが、そのまま押し切られてリビングの扉を開けた。

別邸とはいえ、人が訪ねてくることのあるリビングは豪華に設えられている。窓には天鵞絨の厚いカーテンが引かれ、光が絞られた照明はクリスタルのシャンデリアだ。室内で一際存在感を放っている大きなソファは最高級の本革製だった。

その真ん中に優雅に腰を下ろし、長い足を組んで新聞を読んでいる一人の男がいた。青みがかった黒

髪に、琥珀色の瞳。青白すぎる肌の色が整った顔立ちをより一層引き立てている。

「帰ったのか」

側に近寄っていくと、男は橘香を見ることなく、つぶやいた。

「……アレクさま、ただ今戻りました」

「ああ」

橘香が挨拶しても、アレクは一向に顔を上げない。無言で、新聞のページを繰っている。

それでも、ただ座っているだけで他者を寄せつけない威圧感が、絶対的存在力を見せつけている。

何をしようとも、アレクは許される。なぜなら、

アレクこそがこの別邸の主だからだ。

動くことも離れることもできずに立ち尽くす橘香の後ろから、由那が飛びついてきた。

「ほらあ、アレクさま見てくださいよー。この制服、かわいいでしょー。セーラー服なんですよお」

由那の賞賛する声に、アレクはちらりと視線をあ

げた。

夏らしく涼しげな白地の半袖に、セーラーの襟には、紺色のラインが二本走っている。胸元には水色のリボンと、同じ水色の膝丈のプリーツスカートという制服だった。

世間一般にはかわいいと評判で、憧憬の眼差しで見られることが多い。だが――

「馬子にも衣装だな」

「っ」

それだけ言って視線を手元に戻すアレクの前で、橘香は羞恥に頬が熱くなった。

確かに橘香は、特別美人というわけではない。褒めてもらえるとは思わなかったが、冷淡に指摘されたのが恥ずかしかった。

嫌だ。自分の柄じゃない。馴染めない――と思いつながら、もう一度高校に通えることが嬉しかった。何しろ、一度は中退を覚悟していたのだ。心のどこかでそんな風に浮かれていたことを見透かされたよ

うな気がする。

唇を噛みしめてうつむく橘香の代わりに、由那が抗議した。

「もうっつ。アレクさまったら素直じゃないんだからあ」

「アレクさまはもう少し言葉を選ばれる必要がありますね……」

明太郎も呆^{あき}れているが、アレクは「そうか」と意に介さない。

落ち込む橘香の両頬を手で挟み、由那が下からのぞき込んでくる。

「そんなことないよお。橘香ちゃん、よく似合ってるよ、セーラー服！」

「……きつと、由那さんのほうが似合いますよ」

懸命に慰めてくれたが、橘香は自嘲の笑みを浮かべる。

「いやあん。橘香ちゃんたら、うまいんだからあ。あたしもう二十五なのにー、似合うわけないよお」

由那は一瞬、目を丸くしてから、橘香の体をぶつ

真似をした。

由那は謙遜^{けんそん}するが、橘香は本気だった。身長が百六十五センチあり、女性としては長身の部類に入る橘香に対して、由那は百五十二センチという小柄な上に、恐ろしいほど童顔だった。この制服も、小さくてかわいらしい雰囲気^{ふんいき}の由那のほうが似合うことは間違いない。

できれば代わってほしいと溜^ため息^{いき}を吐いた橘香に、由那が心配そうに眉根を寄せる。

「橘香ちゃん、どうしたのお？ 元気ないねえ」

普段ならば、アレクのあの程度の言葉で落ち込む橘香ではない。

「学校で何かありましたか」

明太郎にも気遣われ、初めは「何でもないと誤魔化^{ごまか}そうとした橘香だったが、二人からの執拗^{しつよう}な追及に根負けして白状した。

「あの……どうしてもあの学校じゃなきゃいけない

んですか？」

「気に入りませんか」

「ええー制服、かわいいじゃないー」

意外そうな明太郎に、由那も言葉を被せてくる。

由那にとって、最優先事項は制服のかわいいさらしいが、橘香にとってはそうではない。むしろ、制服なんてダサくて結構。

「そうじゃなくて……。わたしはお嬢さまじゃないし、分不相応っていうか……浮いてるといふか。どうせなら、もっと普通の公立校に通いたかったんですけど……」

よりにもよって、なぜ全国に名前が轟く生粋のお嬢さま学校なのだと、橘香はしどろもどろになりながらも、自身の心の内を吐露する。

橘香の言い分を聞いて、明太郎が「ふむ」と顎に手を当てた。

「そう言われましても、あの学校は、仲塚原の管理が行き届いておりますからね。身元がよくわからない

い人間が多数いる場所に、橘香さんを行かせるわけにはいきませんから」

「おまえの体はおまえ一人のものではない。自覚しろ」

橘香を論そうとする明太郎に、アレクが言葉を被せてきた。

「……その言い方はすごく誤解を招くと思うのですが」

まるで橘香が妊娠しているような物言いだ、真実はまったく違う。

橘香の抗議など、アレクに届くことはなかった。

「我は事実を言ったまでだ」

「……………」

基本的に、アレクが他者の話に耳を傾けることはない。反論するだけ時間の無駄と橘香が黙ると、アレクが唐突に読み終えた新聞を放った。

「あーまた！」

そうやって、すぐに何でも放るから、あつという

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。